れた．一方術式の差では，胆のう空腸吻合でやや遅い傾向が認められた．肝機能との検討では Al-P 高値例で，肝内胆管のうっ滞像が多く認められまた腸管への排泄時間も遅くれが認められた．

13. 閉塞性黄疸をきたした腹部大動脈瘤の一例

市木　敏夫　大本　俊文　稲川　章
東　和義　森　正樹　千屋　周三
勝田　静知　（広島大・放）
中西　敏夫　向田　邦俊　小川　喜輝
佐々木正博　（同・中放）

閉塞性黄疸をきたした腹部大動脈瘤の一症例を，エコー，CT，RI 等の非侵襲的診断法を用いて検討した結果，肝門部に達する巨大な嚢状腹部大動脈瘤が，胆道閉塞の原因であることが判明した．その診断の過程および術後の follow に，RI アンジオ，肝胆道シンチ，レノグラフィー等の核医学動態機能検査法が有用であったので報告する．

14. RI アンギオの経験（興味ある collateral pathway を呈した上大静脈症候群の 2 例）

佐々井一彦　江口　誠一　小林　久人
松本　常男　横山　敬　中西　敬
（山口大・放）

RI アンギオを上大静脈症候群を来たした 2 症例に施行した．症例 1 は放射線療法のみにて治療した右肺門部肺癌の69歳，男性症例．症例 2 は右上葉切除および術前術後照射を施した vt-Pancoast tumor の58歳，男性症例であった．右肘正中皮静脈より第 1 症例は $^{99m}TcO_4^-$ を，第 2 症例は ^{99m}Tc-HSA を注入．ともに右鎖骨下静脈は描出されるも，右腕頭，上大静脈は描出されなかった．症例 1 は右外側胸静脈から肋間，奇静脈を通り右心系に帰る collateral pathway が形成されていた．症例 2 は前例と異なり，右外側胸静脈，内胸，肋間静脈の collateral pathway から shunt を形成し，直接肺静脈および左心系に帰る非常に希な血行動態を示した．shunt の存在は ^{99m}Tc-MAA で両腎が描出され確認された．RI アンギオで複雑な collateral pathway および shunt の存在を追求することができた．使用した RI が異なり像も異っていたが，描出条件の差によるものと考えられた．

15. ^{123}I-orthoiodohippurate による腎機能検査

石根　正博　長尾　修自　最上　博
村瀬　研也　小泉　満　稲月　伸一
飯尾　篤　浜本　研　（愛媛大・放）

^{123}I-OIH を用いて種々の腎動態機能解析定量的評価を試み，臨床的有用性につき検討を加えた．経時的シンスグラムは腎実質イメージと排泄イメージが同時に得られ，しかも ^{123}I の物理学的特性により像が鮮明であるため実質性疾患のみならず，水腎症の形態的診断にも有用であった．局所レノグラム，functional image も容易に作成でき，腎内局所性病変の病態，範囲の把握が可能で，特に水腎症で実質，腎盂機能の分離評価に役立った．さらに直接演算子法を用いた伝達関数算出より，腎内平均通過時間の算出が可能であり腎機能の定量的評価に役立つものと考えられた．

16. ^{99m}Tc-DPD の骨集積性に関する基礎的，臨床的検討

大塚　信昭　長井　一枝　米田　正也
沢井　通彦　村中　明　斉藤　純一
伊藤　安彦　（川崎医大・核）

1981年 A. Schwarz と G. Kloss らは ^{99m}Tc-DPD (2, 3-dicarboxypropane-1, 1-diphosphonic acid) が従来の骨スキャン剤よりすぐれた bone scaning agent であることを発表した．われわれは今回 DPD の骨集積性を MDP との比較を中心に基礎的臨床的に検討した．家兎を用いた基礎検討では血中クリアランスは投与後 120分よりわずかに MDP より低値となった．骨集積性に関してシンチメトリー，シンチグラムの評価ではほぼ同程度の骨集積性を示した．臨床的検討では，同一患者において DPD および MDP の血中消失率を比較すると，投与後10分における血液内放射能に対する投与後 1，2 時間における血液内放射能比は，ほとんどの例において DPD の方が低値であったが有意差はなかった．同一患者における DPD と MDP のシンスグラムの比較では，病的骨対正常骨比は投与後は 1.5 時間，2 時間とも両標識物は同程度であるが，病的骨対軟部組織比は DPD の方が 2 時間で大であった．以上より DPD は MDP とほぼ同程度またはややすぐれていると結論される．

Presented by Medical*Online